

会 議 名	第3回MINATOビジョン策定支援業務委託事業候補者選考委員会
開催日時	令和7年2月26日（水曜日）午前9時30分から正午まで
開催場所	港区役所914会議室
委 員	出席者5名 岡本 多喜子 委員長（明治学院大学名誉教授） 荒川 正行 副委員長（港区企画経営部長） 岡本 三彦 委員（東海大学政治経済学部教授） 小松 尚平 委員（一般社団法人デザインシップ理事） 中村 ゆかり 委員（港区芝浦港南地区総合支所協働推進課長）
事 務 局	企画経営部企画課長、企画担当係長、企画担当
会議次第	1 開会 2 第二次審査実施概要について 3 事業候補者によるプレゼンテーション及びヒアリングの実施 （1） A事業者（約30分間） （2） B事業者（約30分間） 4 第二次審査結果及び事業候補者の選定について 5 その他 6 閉会
配付資料	<配付資料> 資料1 第二次審査実施概要 資料2 第二次審査採点基準表（2事業者分） 資料3 第二次審査における共通質問事項趣旨 資料4 第2回選考委員会議事録概要 資料5 第一次審査・第二次審査集計結果（※採点終了後、机上配布） 参考資料1 第一次審査集計結果 参考資料2 事業候補者選考基準 参考資料3 仕様書（案） 参考資料4 事業者提出資料（2事業者分）
会議の内容	
	【1 開会】 【2 第二次審査実施概要について】 （事務局から第二次審査の概要を説明） 【3 事業候補者によるプレゼンテーション及びヒアリングの実施】

	(1) A事業者(約30分間) (A事業者プレゼンテーション・質疑応答)
A委員	プロのグラフィッカーに依頼する場合など、再委託になると思うが、どのような業務を委託するのか、これまでの実績を含めてお聞きしたい。
A事業者	特にワークショップの中でグラフィッカーに入ってもらい、話し合っている内容をデジタルで絵にしていく。他区の事業で2例ほど導入実績がある。絵にして可視化することで、発想が膨らむとともに、それ自体が成果物にもなる。また、欠席した方がいた場合も、絵を見ることでどんな議論があったかを振り返ることができる。
A委員	再委託する場合、港区の意向をどのようにマネジメントして反映していくのか。
A事業者	再委託業者に丸投げするのではなく、弊社・再委託業者・港区の3者で協議し、ワークショップの進め方から最終的にどんな絵にしていくのかを決めていくことを想定している。
E委員	全体を通して、子ども・若者に重点を置いた提案という印象を受けた。多様性という観点から、子ども・若者以外の世代にどうアプローチしていくのか教えていただきたい。
A事業者	タウンフォーラムの参加者は、若者世代よりも上の年代が多い。そのため、若者の意見を付け加えることで、結果的に多様な意見になると考える。タウンフォーラムでの意見だけではなく、スマートフォンを活用するなど、より多様な意見を集めたい。
E委員	港区は、外国人住民の数も多い。外国籍の方へのアプローチも教えて欲しい。
A事業者	絵を用いることで、言語が分からなくても内容を伝えことができると考える。また、意見募集の際に2次元コードを使用し、外国語での表記を追加することで、外国人からの意見も収集できるよう工夫していきたい。
E委員	若い世代と高齢世代のギャップは、どうすり合わせていくか。
A事業者	ワークショップの場において、高齢の方のみでは意見が対立するケースが多いが、議論の場に子どもが参加し、子どもの意見が出ると、その意見を支援し

	ようという雰囲気生まれる。そのため、子どもたちの発想を支援する雰囲気を作ることで、意見の融合が図られると考える。
B 委員	何歳くらいの子どもの想定しているか。また、他区でワークショップを行った際の反応や評価はどのようなものか。
A 事業者	子どもファシリテーター講座を行った際は、小学校2年生から参加していた。港区のタウンフォーラムでは、小学校高学年から中学生を対象にした方が良いと考える。 反応については、印象が柔らかく、分りやすいということで評判が良かった。他区では教育委員会に協力いただき、学校を通じて子どもからの意見をもらった。学校や教育委員会からの協力を得られれば、港区でも同様に子どもからの意見をもらうことが可能と考える。
B 委員	港区の強みと弱み、また、5地区に分かれていることについて、どう考えるか。
A 事業者	港区の強みと弱みについて、Well-being 指標から見ると、強みとしては多様な企業が集積していることや娯楽が盛んなこと、そして行政が総合支所ごとにきめ細やかなサービスを行っている点が挙げられる。 一方で、都心区であるため緑や自然が地方に比べて少ないことが弱みと考えられる。環境活動に子どもたちを巻き込み、地域からの要望に対応するなど、これらの弱みにアプローチすることが重要である。 港区は5地区に分かれており、それぞれに特性がある。例えば、芝浦港南地区は若い方が多く、高輪は古くから住んでいる方が多いといった特徴が見られる。 港区全体としては日本の中心に位置し、港区の特色を打ち出すことが大切であるとともに、地域ごとの方向性も明確にすることが望ましい。 また、防災の観点からも、5地区それぞれの対応を考慮する必要があると認識している。
C 委員	ワークショップについて、多様な主体がいる港区ではあるが、どのようにグループ分けをして、可視化していくのか。議論をビジュアライゼーションして、認識していなかった課題を発見した際の良かった点について教えていただきたい。
A 事業者	タウンフォーラムにおいて、グループ分けの方法よりも、議論の進め方を重視したいと考える。今回は、タウンフォーラムの参加者以外からも意見を収

	集したいと考えている。
C委員	ビジュアライゼーションした際の効果について、新たな発見の事例があれば教えてほしい。
A事業者	絵にすることで、新たな気づきを誘発し、議論を活性化させたいと考えている。ワークショップの最後にグラフィッカーから感じたことを含めてフィードバックをもらうことで、参加者が外から見た自分たちを認識し、それが議論の活性化につながるという事例もこれまでにあった。
C委員	Well-being 指標は、一般的な指標として用いられるものなのか。また、港区が特異的に良い点があれば教えてほしい。
A事業者	Well-being 指標は、他自治体でも活用している。港区は高水準であるという印象がある。特徴的なのは、主観データが客観データを大きく上回っている点であり、これは港区ならではの特徴である。 実態よりも良いイメージを持たれている部分があるため、その点については実態を引き上げるフォローが必要であると考えている。
D委員	港区の Well-being 指標は、かなり高いということか。
A事業者	主観データは非常に高い水準にあり、客観データにおいても、遊び・娯楽、地域行政、事業創造といった港区らしい項目は偏差値 70 を超えており、非常に高い評価を得ている。その他の分野でも偏差値 50 を超えている項目が多い。 しかし、都心区の性質上、住宅環境や自然の分野は偏差値 50 を下回っているため、これらの弱みをフォローすることが必要であると考え。
D委員	港区のビジョンを策定する際の重要となる点や進めるべき特徴があれば教えてもらいたい。日本の自治体をリードする取組とはどういうものか。
A事業者	これからのタウンフォーラムの議論の中で考えていくことではあるが、子どもや若者がいきいきと過ごせることを目指すことが重要である。港区は財政的に豊かであり、教育や子育ての水準が他の自治体に比べて高い。 子どもの意見を政策に反映し、ビジョン策定やその実現に子どもが関わるサイクルを構築することで、港区ならではの取り組みが可能となると考える。
D委員	港区には多様性がある中で、どのようなタウンフォーラムをイメージされて

	いるのか。規模などはどう考えているか。
A事業者	現在のタウンフォーラムをイメージし、9分野で各10人ずつの議論を考えていたが、これまでの枠に捉われないのであれば、100人単位での議論も十分に可能であると考え。ただし、1グループの人数が多くなると議論が難しくなるため、5人ずつ20グループでの議論が可能であれば、かなりの多様性を担保できるのではないかと考える。
D委員	グラフィッカーはどのような方になるのか。また、その人の個性に左右される部分が大きいと思われるので、どのようにコントロールをしていくのか。
A事業者	再委託を想定しており、大手企業などでも実績のあるプロのグラフィッカーを採用する予定であるため、質の担保はできると考えている。ご指摘のとおり、グラフィッカーにはそれぞれの個性があり、画風も異なる。そのような個性を楽しみながら、違いがあることも楽しめるようなグラフィックを作っていくことが大切であると考えている。
B委員	本日参加されている方は、提出資料に記載のある担当者か。それとも、全体の企画をしている方か。
A事業者	全員が企画と事業に関わる担当者である。 (A事業者退出) (2) B事業者(約30分間) (B事業者プレゼンテーション・質疑応答)
A委員	デザイン化やグラフィックレコーディングなど、再委託を想定している業務はあるか。
B事業者	視覚的に効果的に見せる点で、専門的な事業者の力を入れることが効果的と考えている。グラフィックレコーディング、映像化での発信やアイコン化、また、子ども向けコンテンツとして具体的な絵を描いたり、刊行物等を作ったりする部分は他の事業者の力を借りることを想定している。
A委員	再委託を考えている事業者とはどのような関係性や実績があるのか。

B事業者	グラフィックレコーディングについては、直近で他区の基本構想の策定の時に関わった事業者にも今回もお願いしたいと考えている。その事業者は複数区での実績がある。映像化やビジュアル化のコンテンツについても、都内の自治体での実績がある事業者と連携していきたいと考えている。
A委員	再委託業者との関係の中で、港区の意向が反映されるよう、どのようにマネジメントしていくことをお考えか。
B事業者	我々が港区の意見をかみ砕いて、デザイン業者に中継して伝えることを基本としつつ、三者で話し合う機会も設け、齟齬のない意思疎通を図っていきいたいと考えている。
E委員	本日の出席者について、業務での役割や立場をお聞かせいただきたい。
B事業者	プロジェクトの主任は、全体の統括および再委託業者との調整を担当する。また、港区の窓口としての役割も担う。副主任は、実際の作業を多く請負い、サポートメンバーは業務主任をサポートする。打ち合わせの際は、副主任と同等の経験を持つ者が3、4名ほど参加する予定である。
E委員	ワークショップの中で、若い世代と高齢世代のギャップを埋め合わせる手法があれば教えていただきたい。
B事業者	ワークショップの参加率を考えると、7割以上が60代のケースが多い中で、幅広い世代に参加してもらう工夫が必要である。グループの年齢構成をバランスよくすることが大切である。また、ここでは現時点の要望ではなく、2040年を想定して議論するよう認識付けを行う。固定の世代の意見ではなく、グループ全体の意見としてまとめる。フィールドワークでは、将来像を家族や友人に聞いてもらう時間を設ける。また、小学生向けには校門前に将来像を並べて、シールを貼ってもらう取組や、高校生向けにはアンケート調査を実施することも可能である。
E委員	フィールドワークについては、次回までの宿題とする点など、ハードルは高くないのか。これまでの実績など教えていただきたい。
B事業者	ハードルは低く設定している。ワークショップの中で考えられたものを持ち帰り、家族や友人に聞いてもらう程度のものを想定している。それを次のワークショップに持ち寄り、皆で共有することを行う。 昨年、他区でフィールドワークを通じた体験型ワークショップを実施した。

	この取り組みは、大きな負担なく楽しんで取り組んでいただけたと考えている。
E 委員	ワークショップの参加者が途中で来なくなってしまうケースがある。参加者を飽きさせず、最後まで来てもらえるような工夫はあるか。
B 事業者	楽しさを押し出して進めていきたい。サイコロを振って自己紹介を行うなど、導入部分から仲間意識を醸成する取組を行う。会話を重視し、積極的な意見交換ができるよう、ファシリテーターが話しやすい環境を整え、継続的な参加を促す進行を心掛ける。将来像の報告会では、参加者が意見をまとめて発表し、区民に共有することになるので、ワークショップの中で区をよくしていこうとする意識付けも行っていきたい。 他区の事例では離脱者はいなかった。継続的な参加のためには、等しく発表の機会を設けることが重要である。アンケート調査では、同じ考えを持つ人がいることがわかったという回答が多く、新たな気づきを得られる場にすることが大切である。また、昔から住んでいる方と新しく住み始めた方の意識の差を調整することが重要である。 補足として、ワークショップは事前に設計・検証を行い、予行なしで実施しないようにしている。
B 委員	提案書にはコンサルタントや公認会計士が多くいると記載がある。今回の事業の中で、防災士や建築士などの他の資格を持った方に関わってもらうことも可能か。
B 事業者	現在の体制にはいないが、必要であれば、自社の中からそのような資格を持ったメンバーの参加も可能である。グループ会社の中に専門家が2万人おり、建築事務所もある。
B 委員	ワークショップに参加する港区の多様な人々とは、どのような人を想定しているか。
B 事業者	一般的な自治体の総合計画は分野別になっているが、区民からすると世代別やサービス別といったライフステージ別の総合計画という設計も考えられる。そうした設計であれば、多様な人々を包括できる。他自治体で提案し採用された事例もある。 港区は全国から見ると中心的な自治体であり、高い行政サービスが提供されていると一般的に思われている。しかし、高いサービスの中に漏れている世代があるかもしれない。ライフステージ別の総合計画にすることで、多様性

	を表に出し、それに応えた行政サービスが提供できているかを確認することもできる。
B 委員	港区の強みや弱み、また、5つの地区レベルでの計画の必要性について意見をお聞きしたい。
B 事業者	港区にはそれぞれの地区に支所があり、地区ごとの活動が行われている。地域性はそれほど大きくない印象を受けるが、これまでの関係業務の中で港区の職員と話していると、地域単位の話も出るため、地域別のビジョンも必要になるかもしれない。 人口動態を見て特徴的なのは、30代後半の転入が多い一方で、リタイアする50代後半から60代の転出が若干多い点である。これは若くして住み始めた方が最終的には出て行ってしまうことを意味し、最後まで港区で人生を謳歌していただけるような取組の充実が必要であると考え。 強みとしては、若者の流入が多いことが挙げられる。企業が集積しており、スタートアップなどの企業の力を活用して官民連携で施策を推進できる可能性も高い。 一方で、産業が集積し、個人の所得が高いという恵まれた状況にあるが、それを十分に生かしているかは課題であると考え。
C 委員	ワークショップの部分は、プロトタイピングをするなど、デザインプロセスの管理といったこともやっていたのか。
B 事業者	やっていた。
C 委員	ワークショップについて、フューチャーデザイン思考は設計やお題が重要であり、ハードルが高い印象がある。どのような体制で実際に設計していくのかを詳しく聞きたい。
B 事業者	今の立場から未来のことを考えると、現状の延長線上の意見が出てしまうため、避けたい。未来の人になりきり、2040年の世界を想像し、未来の立場から今に対して提言をしてもらう。 最初は混乱を避けるため、ワークショップの意味を理解してもらう場面を設ける。考えやすいお題や問いかけの仕方は、事前に設計・検証してから実施する。 ワークショップで重要なのは思考の枠を広げることであり、日頃考えていないことを考えてもらう仕掛けを作ること。フューチャーデザインはこれがやりやすい。

	視点を3つ変えて進める。現在から見た未来、過去を振り返る、未来に行って周りの風景を見る。これにより新たな気づきを得られるため、フューチャーデザインを採用した。 20年後の未来を議論するためには、港区のビジョンに関係する論点を設定する必要がある。自治体の概要として人口や財政状況を掲載するケースが多いが、歴史を掲載することが大切である。 同様に、20年前や40年前の港区を理解してもらった上で、20年後の議論を進める。
C委員	プロモーションについて、オンライン投票やライブ配信は少しハードルが高いと感じる方もいると思われる。これまでの事例で、リテラシーの違いをどうマネジメントをしたのかを教えてください。
B事業者	他市では、動画配信サイトを用いた会議体の運営を行った。オンラインとリアル併用型を採用し、現地での参加とオンラインでの参加を可能にすることで、多様な参加ニーズに応えている。また、手話通訳者を用意し、手話でも理解できるような要望にも対応している。今回も多様な方が参加できるような手法を取り入れたい。オンライン投票結果は画面に表示され、視覚的に分かりやすい。また、コメントも画面下に表示されるため、ライブ感がある。
C委員	制作物について、動画、紙媒体、アイコンなど、バリエーションが豊かで、さらに漫画や海外向けに絵柄を変えている。こうしたデザインは、チームに情熱がないとできないものであり、上手い出来ないことも多い中で、アウトプットについてどのような体制になっているのか。この点について教えてください。
B事業者	自治体と一緒に築き上げ、いかに伝えるかということ、そして進捗管理が大切であると考え。特に、デザイナーは強いこだわりを持って仕事をしているため、期限に疎い場合がある。そのため、日単位で進捗管理を行い、きちんと線を引いていくことが我々の役割である。 また、体制の中には外国籍の人材もあり、自治体のマネジメントの専門家であり、英語も使えるため、冊子化の際には内容のチェックも可能である。このような人材も活用していきたい。 デザイナーと行政の間には思考の違いがあることをこれまでの実績で感じているため、両者の調整を行っていきたい。
D委員	質問が3つある。 1つ目として、2040年の港区のイメージについて、重要になる部分などの

	議論がなされていれば教えていただきたい。 2つ目として、タウンフォーラムには多様な方が参加されると思うが、どのようにコーディネートしようと考えているのか。特に就学児以上の子どもについてはどう考えているのか。 3つ目として、これまでの他自治体における御社の実績について、市民や周りの方の評価・反応を教えていただきたい。
B事業者	港区はいろいろな世代に訴求力のあるまちであり、ビジョンには様々な人の憧れや楽しみが感じられる要素を取り入れたいと考えている。東京タワーのようなランドマークを残しつつ、未来を築くビジョンを社内で議論した。20年後に向けて変わるべきことと変わらない方がよいことを整理することが重要である。 タウンフォーラムでは、小学校3年生を呼んだ事例や、各テーブルに大学生が参加した事例がある。保護者と子どもの参加も提案している。実績に対する評価はクライアントから聞くことが多いが、「また参加したい」という市民の声もよく聞く。 他市の総合計画では、ランドマークを取り入れたビジョンが好評で、郷土愛やシビックプライドを刺激することが重要であると実感した。 評価の面では、作成物が足りなくなり増刷を頼まれることが多く、親しみのあるものが作れていると感じている。 (B事業者退出)
委員長	【4 第二次審査結果及び事業候補者の選定について】 これより、議題4「第二次審査結果及び事業候補者の選定について」審議を行う。まず事務局から、集計結果について説明をお願いする。
事務局	それでは、集計結果を発表する。 最初に、本日の二次審査の結果について報告する。 625点満点中、A事業者が440点、B事業者が550点となった。 一次審査結果は、採点項目の923点と加点の26点を合計し、両者ともに949点であった。 そこに、本日の二次審査の点数を加算した結果、1,940点満点中、A事業者が1,389点、B事業者が1,499点となった。
委員長	評価したポイントなど、各委員から順番に講評をお願いしたい。

E 委員	A事業者は区の現状をよく理解しているという点を評価した。経験と実績があるため、安定感があった。しかし、委員から質問があったにも関わらず、説明員の立ち位置が最後まで明確にされず、その点が明らかにされなかったことは、取組意欲の点でマイナスの評価となった。 一方、B事業者は、全体的に提案が非常に魅力的であった。個々の質問に対する説明も具体的で、資料上だけでなく、実際に提案を実現できると感じた。また、一つの質問に対してメイン担当ではない方からも補足があり、チームワークの良さも感じられたため、安心して任せられると思った。
A 委員	両者とも信頼できる事業者であると感じた。A事業者については、多様性の観点から福祉や介護の言及がほぼなく、子ども・若者に偏っていた点が残念であった。 B事業者については、多様性に関する説明がライフステージ別や世代別の視点からであり、A事業者と大きな違いはなかったが、報告会で手話通訳者を配置し、障害のある方にも配慮している印象を受けた。 医療・介護分野における港区の分析について、A事業者は他の都心区と同様に近隣自治体と連携して介護施設を運営するサービスを提案していたが、これは区民が近隣自治体に移らなければならないと感じさせるものであった。 一方、B事業者は50代、60代が港区から転出するデータを踏まえ、この世代が住み続けられる施策を考える必要があると説明しており、この点で差を感じたため、B事業者をより高く評価した。
C 委員	資料の質問をした際に、A事業者は資料以上の回答はなかった。一方で、B事業者は資料だけを見た際には、政策面で多くの記載があったため、逆に信頼性に疑問を感じ、1次審査では点数を低く評価した。しかし、本日の説明を聞いたところ、政策に詳しく、様々なことを記載したいという思いからそうした資料記載になっていたことがわかった。 質問を通して意欲を感じ、現場感のディレクションといった点で、安心して任せられると印象を受けた。
D 委員	一次審査の際は、A事業者の評価が高かったが、本日のプレゼンテーションを聞く限りでは、B事業者の方が信頼、安心できるという印象を受けた。他の委員がおっしゃったとおり、B事業者は質問に対してもこちらが求めている以上の答えが返ってきた。 A事業者の方が港区のことに詳しいかもしれないが、将来的なことを考えると、B事業者の方が期待を持てると感じたため、B事業者に高い評価を付けた。

B 委員	質問に対して、A 事業者は一般的な回答しかなかった印象を受けた。A 委員がおっしゃったとおり、区民が他の地域に出ていってしまうという説明にフォローがなかったのは残念だった。若者中心の説明に留まったことについても、気になったところである。外国人についてもこちらから質問して初めて意識していた印象であり、あまり認識がなかったのではないかと感じた。 B 事業者に関しては、意欲が高く、この事業をやりたいという意気込みを感じた。資料に記載された以上に、港区に関わりたいということを感じたとともに、実際に実力があることもわかったので、B 事業者に高い評価を付けた。
委員長	委員は他に何か発言はあるか。 (発言なし)
委員長	意見交換を踏まえて、採点に修正の意向はあるか。 (修正の意向なし)
委員長	審査結果や各委員からの意見を総括し、当委員会としては、B 事業者を事業候補者として選定することとするが、よろしいか。 (異議なし)
委員長	異議なしのため、B 事業者を事業候補者として選定する。
事務局	(選定事業者を公表) 【5 その他】 (事務局から連絡事項を説明) 【6 閉会】